

「二人っ子政策」下で有職女性の 出産・育児観について

HUAN Chang

人口問題はすべての人間社会が共に直面している基礎的で戦略的な問題である。人口減少によって、社会経済の衰退や社会保障制度の継続が困難になる恐れがあり、近年、日本を含む先進国は少子化対策を本格化している。

中国では 1949 年に建国した後、社会が安定化すると共に、人口が急増し始める。総人口数は年々上昇し続け、居住問題、生態環境問題、食糧問題が深刻化した。そのような問題の解決が求められ、1979 年に一組の夫婦につき子どもを一人に制限するという「一人っ子政策」が導入されるに至った。「一人っ子政策」の導入によって、出産抑制という効果は認められるようになったが、同時に逆機能も現れた。少子高齢化が急速に進行したのである。1992 年の合計特殊出生率は、人口置換水準の 2.1 を下回り、1993 年以後ではほぼ 1.8 の低率にとどまっている。また、「一人っ子政策」によってもたらされた出生性比不均衡、「失独者」などの社会問題も深刻しつつある。その結果、従来の大家族制度は崩壊し、核家族化が進行してきた。

そのような変化を受けて 2013 年に政府は、「夫婦どちらかが一人っ子ならば第 2 子の出産を認める」という、「一人っ子政策」の緩和に踏み切った。だが新制度の利用率は低迷し、2 年後にさらなる変更を迫られる。2016 年には「一人っ子政策」が廃止され、「二人っ子政策」が全面的に実施されたのである。これは中国の出産・子育て政策における重要な改革である。しかし 2016 年以降、第二子の出生数は増加しているが、中国の現在の出生率は依然として低いレベルとなっている。中国人の出産・育児に対する意識は、強力な人口政策の影響だけでなく、複数の社会的要因と連動しているのであり、人口政策が変化しただけでは状況が劇的に変わるわけではないのである。

また、社会主義である中国では、中国の女性は「天の半分を支える」、「男ができることは、女もできる」という教育を受け、労働意識や社会進出意識が高い。中国では女性は出産後もほとんどが退職せず、そのまま仕事を続けている。働く女性は仕事と家庭の二重負担を負い、女性のスト

レスも二重になっている。国による子育て支援もいまだ十分に整っておらず、乳幼児園の普及は足りていない。しかし現在の中国では、一部の家庭は夫が家事の一部を担っているが、大部分の家庭では家事はやはり妻がしている。また祖父母の育児支援がある家庭も多いが、祖父母が孫を過保護に扱ったり育児方法が古く、経済面や仕事が原因で親世代からの育児援助を受け入れるしかない子世代との間に軋轢が生じることも少なくなく、それも現代中国女性のストレスになっている。

このような状況のなかで実施された「二人っ子政策」は、中国の働く女性にどのような影響を与えているのだろうか。はたして働く女性たちは子どもを2人産みたいと思っているのだろうか。本研究では、インタビュー調査の分析を通じて、たとえ「二人っ子政策」ができたとしても、なぜ働く女性たちは子どもを2人持つことを望まないのか、そのような彼女のたちの出産育児観に大きく影響を与える職場の環境はどのようなものなのか、検討していく。

本論文は、7章から構成される。第一章では、本研究で取り組む問題の背景となっている事情について概説する。次に、「二人っ子政策」以降有職女性の第二子出産意欲に関する先行研究を参照しながら、本研究の位置づけを行い、本研究で取り組む問いを提示する。

続く第二章では、中国における人口問題がどのようなものでありどのような人口政策がとられてきたかを概観する。中国では、様々な人口政策を経て、1979年からの「一人っ子政策」により、出生率の低下がもたらされた。2016年には「二人っ子政策」が全面的に実施されたが、現在の出生率は依然として低いレベルとなっている。また、少子高齢化、「4・2・1」家族と出生性比不均衡などの人口問題も浮上している。

第三章では、中国の女性の就労をめぐる現状、また中国の女性就労問題と支援策について詳しく解説する。中国の女性は積極的社会進出しているが、男性と比べると、職場においては依然として不利な状況に陥りやすいという状況を明らかにしていく。

第四章では、中国の子育て状況、特に育児の実態、出産育児意識の変化、出産育児に関する支援策、また中国の伝統的な家族規範とその変化について概略的に述べる。

第五章では、「二人っ子政策」における有職女性の出産・育児に対する価値観の実態を調べるために、2019年8月20日から2019年9月7日まで、中国安徽省にある公立中規模N病院でフルタイムで勤務する、20～40代ですでに一人目の子どもを持っている女性(医師、看護師、薬剤師)および病院管理者、合計14名を対象に、出産・育児に対する価値観についてインタビューした調査の結果を紹介する。

第六章では、調査結果についてさらに詳しく考察し、その意味するところを掴む。

終章では、本論文で述べている研究の内容とその成果を総括する。また、残された今後の研究課題についても述べる。